早稲田大学人間科学部
春木 豊

The relationship between the frequency of touching by parents
and children's psychological adjustment

Hajime Yamaguchi*¹, Haruyoshi Yamamoto*², Yutaka Haruki*³

*¹Seitoku University, Iwase, Matsudo, Chiba 271-8555

*²Yokohama Rosai Hospital, Kozukue, Kohoku-ku, Yokohama 222-0036

*³School of Human Sciences, Waseda University, Mikajima, Tokorozawa, Saitama 359-1192

In this study, we investigated the relationship between the amount of physical touch received from parents and children's psychological adjustment. Two hundred thirteen university students and 69 clients in a department of psychosomatic medicine were asked to complete questionnaires on touch and body awareness (STAI-T, and SDS). The results were as follows; (1) Fathers touch their children less regardless of sex, while mothers touch their daughters more than their sons. (2) Child rearing attitudes are related to the frequency of touching by parents. (3) In female subjects, memory for parental touch is positively correlated with the level of psychological adaptation.

Key words: body touch; psychological adaptation; psychosomatic medicine.

問題と目的

幼少期の母子の身体接触の研究は、Harlow (1958) のアタッチメント研究に始まり、多くの研究者がその重要性を指摘してきた (Bowlby, 1969; Montagu, 1971; Spitz, 1946)。たとえば、Montagu (1971) は、動物や人間を対象にした多くの研究から、幼少期や児童期に接触の満足を得ることは、その後の健全な行動の発育には欠かせないものだとして述べている。また、生まれた直後に母親と身体接触があった幼児は、それが

なかった幼児よりも泣くことが少なく、微笑みや笑いが増加することや (Klaus & Kennell, 1970)、幼児期に母親からあまりあるいはほとんど接触されなかった赤ん坊は、将来他人との絆を結ぶことが困難になることなどが示されてきた (McNeeley, 1987)。これらの研究から、子供の心身の健康にとって、積極的に触れることの重要性が示唆される。実際に Field, Schanberg, Davalos, & Malphurs (1996) は、乳児にマッサージを施す群と施さない群を比較した結果、施した群では乳児の体重が増加し、眠りにつくまでの時間が短縮し、より活動的になることなどを示した。

一方、成人後の身体接触については、抑うつやアレキシミア (Alexithymia; 失感情症) などと関連があると指摘されている。たとえば、心身症の患者に広くみられるアレキシミアの患者は、触診に対して過敏に反応すること (Sivik, 1993)、抑うつ傾向の患者は、他者との身体接触をより多く求めることなどが明らかにされている (Stein & Sanfilippo, 1985)。これらの研究から、成人後も心理的不適応と身体接触との間には関連があるものと考えられる。

それでは、幼少期に受けた身体接触と成人後の心理的側面との関連についてはどうであろうか。山口・春木 (1998) は大学生を対象に、他者から触れられることを否定的に捉える者ほど、幼児期に母親から受けた身体接触が少ないと想起することを明らかにした。この研究や、先の McNealey (1987) の研究の結果は、幼少期に受けた身体接触は、成人後の社会性や情緒の発達に影響を及ぼすことを示唆している。

本研究では、過去に両親から受けた身体接触量と、現在の心理的不適応との関連について、発達の視点を加え明らかにすることを目的とした。具体的には、心理的な適応している者と (以下、健常群とする)、何らかの不適応な症状を有する者 (以下、臨床群とする) との間に、過去に両親から受けたと想起される身体接触について違いがみられるかどうかについて比較する。身体接触と関連があると考えられる両親の側の変数としては養育態度を、子供の心理的適応の指標としては不安や抑うつ、アレキシミアについて検討する。

なお、本研究では retrospective 法により、過去に両親から受けた身体接触量を調べた。その理由は、実際に両親にどの程度触られたのかよりもむしろ、過去に両親から触られた程度を本人が主観的にどのように捉えているかの方が、心理的問題の治療といった観点から、さらにそれを予防するといった観点からは重要であると思われるからである。最近の認知行動療法でも、過去の記憶の再体制化や、認知の枠組み (スキーマ) を変容させることが、クライアントの感情や行動の変容にとって重要であることが示されている。従って、両親から過去に受けた身体接触量を健常群と臨床群とで比較することを目的とした本研究の場合、この

ような retrospective 法を用いるのが適していると考えられる。

方 法

調査対象者 健常群の内訳は、大学生男女213名 (男性32名、女性181名) であった。平均年齢は18.79歳であった。臨床群の内訳は、病院の心療内科に来院した外来患者69名 (男性17名、女性52名) であった。平均年齢は24.68歳であった。患者の主訴の内訳を DSM-IV (APA; American Psychiatric Association, 1994) に基づいて分類した結果、摂食障害27名、適応障害21名、身体表現性障害13名、不安障害4名、気分障害3名、人格障害1名であった。

調査時期 健常群は、1997年9月から1998年6月の間に調査を行った。臨床群は、1998年1月から5月の間に調査を行った。

調査用紙 (1) **身体接触尺度**: 幼稚園入学以前から現在までを6段階にわけ、各々の時期に受けた身体接触の頻度を問う調査用紙 (鈴木・春木, 1989 により作成; 以下では身体接触尺度とする) を用いた。発達段階は、幼稚園まで、小学校低学年、小学校高学年、中学校時代、高校時代、現在の6段階で、各々の時期に父親と母親それぞれからどの程度触られたかについて想起させ、1 (全く触られなかった) ~ 10 (非常によく触られた) で回答させるものであった。

(2) **サイモンズの養育態度尺度**: Symonds (1939) が作成し、鈴木・松田・永田・植村 (1985) によって日本語訳されたものを用いた。これは子供に対する親の養育態度を愛情 (受容—拒否) と統制 (干渉—放任) の2軸に分類するものであり、子供の側が被調査者となり、父親と母親の養育態度に関する各々4項目の質問に回答する。「拒否—干渉」は独裁型、「拒否—放任」は無視型、「受容—干渉」は溺愛型、「受容—放任」は甘やかし型に分類される。

(3) **Body Awareness 尺度**: 岸・佐々木・春木 (1997) によって作成された、「身体の内的過程に対する注意の度合い」を測定する尺度である。13項目から成り、5 (非常に当てはまる) ~ 1 (全く当てはまらない) の5件法で回答するものであった。つまり、得点が高

いほど身体に対する注意の度合いが高いことを意味する。

(4) **STAI-T (State-Trait Anxiety Inventory)**: Spielberger, Gorsuch, & Lushene (1970) によって作成された STAI-T の日本語版 (水口・下仲・中里, 1982) を用いた。質問項目は20項目から成り、各問に対して、「ほとんどない」、「ときたま」、「しばしば」、「しょっちゅう」の4件法で回答するものである。

(5) **SDS (Self-rating depression scale)**: Zung (1965) によって作成された SDS の日本語版 (福田・小林, 1973) を用いた。質問項目は20項目からなり、各問に対して、「めったにない」、「ときどき」、「しばしば」、「いつも」の4件法で回答するものである。

手続き 上記の(1)~(5)の調査用紙を綴じたものを、健常群には一般教養の心理学の授業終了時に配布し、その場で回収した。臨床群には同じものを、患者の初診時に医者が患者に渡し、家庭で記入後、次の問診時に医師が回収した。

結 果

健常群と臨床群の間での Body-Awareness 尺度、STAI-T、SDS の比較

健常群と臨床群の間で、Body-Awareness 尺度、STAI-T、SDS による検査結果について t 検定で比較した。それによると、Table 1 に示したように、Body-Awareness は健常群が有意に高く、不安と抑うつは臨床群の方が有意に高かった。従って、臨床群を対照群として用いることの妥当性が確認されたと考えられる。

両親からの身体接触量の性差と発達的变化

以下の分析において、群ごとに比較した分析を行っ

ているが、結果は身体接触量を絶対量として「多い」、または「少ない」と記述しているのではなく、相対的に比較している。

まず全ての被調査者を対象に、両親からの身体接触量を男女別に示したものが Figure 1 である。まず、調査対象者の性差と両親の性差の発達的变化について検討するため、調査対象者の性と両親の性と発達を要因とした3要因の分散分析を行った。その結果、調査対象者の性、両親の性、発達、各々の主効果が有意だった ($F(1, 272)=5.06, p<.05$; $F(1, 272)=96.18, p<.01$; $F(5, 1360)=287.00, p<.05$)。つまり、男性より女性の方が両親からの身体接触量が多く、父親より母親の方が子供への身体接触量が多く、男女ともに子供の発達につれて両親からの身体接触量は減少していくことがわかる。また、調査対象者の性と両親の性の交互作用が有意だった ($F(1, 272)=6.89, p<.01$)。そこで交互作用について検討した結果、父親は子供の性に関わりなく触れる量が少ないが、母親は女性には男性よりも多く触れることがわかった (Figure 2)。

両親からの身体接触量の養育態度差と発達的变化

両親の養育態度と身体接触量との関連の発達的变化を検討するため、養育態度と発達を要因とした2要因分散分析を行った。その結果、父親の養育態度については、養育態度の主効果 ($F(3, 274)=13.22, p<.01$)、発達の主効果がそれぞれ有意であった ($F(4, 1096)=330.18, p<.01$)。Figure 3 によると、父親の身体接触量はどの年齢水準でも「甘やかし型」の養育態度の父親が最も身体接触量が多く、「独裁型」が最も少ないことがわかる。

母親の養育態度についても同様の分析を行った結

Table 1 健常群と臨床群における Body Awareness 尺度、STAI-T、SDS の得点と t 検定の結果

	健常群	臨床群	t 値
Body Awareness 尺度	36.90 (7.84)	34.00 (9.56)	2.53*
STAI-T	53.23 (9.51)	55.59 (12.01)	2.39*
SDS	51.54 (11.26)	53.75 (7.33)	6.10**

( ) 内は標準偏差 * $p<.05$ ** $p<.01$

Figure 1 両親からの身体接触量の性差と発達の变化

Figure 2 両性における両親からの身体接触量の交互作用

Figure 3 父親の養育態度と身体接触量の発達の变化

Figure 4 母親の養育態度と身体接触量の発達の变化

Figure 5 父親からの身体接触量の発達的变化（男性）

Figure 6 母親からの身体接触量の発達的变化（男性）

Figure 7 父親からの身体接触量の発達的变化 (女性)

Figure 8 母親からの身体接触量の発達的变化 (女性)

果、養育態度の主効果 ($F(3, 273) = 12.06, p < .01$)、発達の主効果 ($F(5, 1365) = 373.15, p < .01$) が有意だった。Figure 4 によると、小学校高学年までは「溺愛型」が最も身体接触量が多いが、それ以降は「甘やかし型」が最も多くなることがわかる。また「独裁型」や「無視型」がどの年齢水準でも全般に少ないことがわかった。

心理的不適応と両親からの身体接触量との関連の発達の検討

まず男女別に、心理的適応と発達を要因とした分散分析を行った。その結果男性では、父親から受けた身体接触量、母親から受けた身体接触量ともに発達の主効果のみが有意だった ($F(5, 225) = 43.33, p < .01$; $F(5, 225) = 63.33, p < .01$)。つまり、男性は健常群も臨床群も同じように過去の身体接触量を評価し、成長に従って両親からの身体接触量が減少すると評価していることがわかる (Figure 5, 6 参照)。一方女性では、父親から受けた身体接触量、母親から受けた身体接触量ともに、心理的適応と発達の交互作用が有意だった ($F(5, 1125) = 20.00, p < .01$; $F(5, 1130) = 11.35, p < .01$)。父親から受けた身体接触については、中学入学までは健常群が臨床群よりも多いと評価するが、この時期を境に傾向が逆転することがわかった (Figure 7 参照)。一方母親から受けた身体接触については、高校入学までは健常群が臨床群よりも多いと評価するが、現在は逆転することがわかった (Figure 8 参照)。

考 察

まず、健常群と臨床群とで Body-Awareness、不安、抑うつについて比較した結果、Body-Awareness は健常群の方が有意に高く、不安とうつは臨床群の方が有意に高いことがわかった。心身症の患者は、一般的にアレキシシミアの傾向が高いといわれており、実際に Body-Awareness の得点が低い傾向が認められた。また、臨床群は不安や抑うつの程度が健常群よりも高かったことは、患者群の構成からも当然の結果であると考えることができる。

次に両親の性差と子供の性差を検討した結果、父親は子供の性に関わりなく身体に触れる量が少ないが、母親は女性には男性よりも多く触れる、というように子供の性によって両親からの身体接触量が異なることがわかった。これは Clay (1966) や 鈴木・春木 (1989) と同様の結果であった。また、男性は女性より両親との身体接触が少なかった点も、鈴木・春木 (1989) や Clay (1966) と同様の結果であった。

次に、父親からの身体接触の発達の変化を養育態度別に検討した結果、父親からの身体接触はどの発達段階でも、「甘やかし型」が最も多く、「独裁型」が最も少ないことがわかった。父親の子供への働きかけには、母親と比べると感情表現が少なく、指示命令的で、情緒的に距離をおいたつきあいをする傾向がみられる (Clarke-Stewart, Perlmutter, & Friendman, 1988)。つまり、父親の働きかけは全体的に「独裁型」に近く、子供に接触するような交渉は少ないと思われ、それと反対の育児態度である「甘やかし型」で比較的多くの接触がなされていると考えられる。

一方母親からの身体接触の発達の変化においては、「溺愛型」や「甘やかし型」で多く、「独裁型」や「無視型」で少ないことがわかった。これに関連して、Raphael-Leff (1983) は、母親の養育態度を受容型 (facilitator) と統制型 (regulator) で比較した結果、受容型の母親は統制型の母親に比べて、子供と同室で寝たり、頻繁な要求授乳を行うことが多い傾向があることを見いだしている。本研究における「溺愛型」や「甘やかし型」は、「独裁型」や「無視型」に比べると、相対的に子供と接触する機会が多くなり、その結果身体接触が多くなったのではないだろうか。ただし、Symonds の養育態度尺度では、4 つの養育態度のどれもが極端ではなく、中庸の態度が最も望ましいされている。本研究で身体接触が多いとされた、「溺愛型」と「甘やかし型」の養育態度が、実際に子供の心理的適応と関連があるのかについては不明である。今後の研究課題としたい。

次に健常群と臨床群との間で、身体接触量の発達の变化を性別に検討した結果、男性は健常群も臨床群も過去の身体接触量を同様に想起したのに対して、女性は健常群の方が幼児期の両親からの身体接触量が多い

と評価することがわかった。幼少期の身体接触は、親子関係の絆を形成する上で重要であることは、多くの研究で指摘されており (Harlow, 1958; Bowlby, 1969)、中でも親子のスキンシップは親子関係の絆を形成する上で重要であり、健全な情緒の発達や社会化に重要な役割を担っている (Klaus & Kennell, 1982)。実際に本研究でも、臨床群の女性は過去の両親からの身体接触を健常者より少なく評価するというように、過去の両親からの身体接触が将来の心理的不適応に影響を与える可能性が考えられる。ただし、男性では心理的不適応と両親からの身体接触量との間に関連がみられなかったことに関しては、男性はもともと両親からの身体接触が女性の場合よりも少ないために、女性に比べてその影響が小さいことによるのだろうか。今後さらに検討すべき課題である。

まとめと今後の課題

本研究では、幼少期に両親から受けた身体接触量の想起と、現在の心理的不適応との関連について検討した。調査の結果、男性は心理的不適応と両親からの身体接触量との関連はみられなかったが、女性では不適応の高い者ほど両親からの身体接触量を低く評価した。また両親の養育態度との関連について検討した結果、両親ともに「甘やかし型」や「溺愛型」の親が最も子供に触れることが多く、「独裁型」や「無視型」が少ないという傾向を示すことがわかった。

今後の課題であるが、まず本研究で用いた身体接触の指標が意味するものについて明確にする必要がある。つまり、身体接触量とは子供の親に対する心理的距離を測定しているのか、親が子供に与える皮膚への接触刺激そのものが重要であるかの問題については明らかにはされていない。幼少期の皮膚への刺激がその後の精神的発達に及ぼす重要性については、Field et al. (1996) がその重要性を確認している。想起による場合の身体接触の意味については今後検討しなければならない。また、今回用いた身体接触尺度は10段階で評定が行われたが、このような細かい評定の是非についても、今後検討すべき課題である。

次に本研究で用いた「身体接触」という言葉で示し

ている内容は、肯定的な触れ方を想定したものであるが、実際には「叩く」、「蹴る」などの否定的な触れ方も考えられる。これらに加えて、触れるタイミングなどの質的な面も重要である。今後、この点についてもさらに詳しく検討しなければならない。

参考文献

- APA (American Psychiatric Association) 1994 *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (4th ed.)*. Washington, DC: Author.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss*. Vol. 1: *Attachment*. New York: Basic Books.
- Clarke-Stewart, A., Perlmutter, M., and Friendman, S. 1988 *Life-long human development*. New York; John Wiley.
- Clay, V. S. 1966 *The effect of culture on mother-child tactile communication*. Ph. D. dissertation, Columbia University; Cited in Knapp (1972).
- Field, T., Schanberg, S., Davalos, M., and Malphurs, J. 1996 *Massage with oil has more positive effects on normal infants*. *Pre and Peri Natal Psychology*, 11, 75-80.
- 福田一彦・小林重彦 1973 自己評価式抑うつ性尺度の研究 *精神神経学雑誌*, 75, 673-679.
- Harlow, H. F. 1958 The nature of love. *American Psychologist*, 13, 673-685.
- 岸 太一・佐々木康成・春木 豊 1997 Body Awareness 尺度作成の試み——身体心理学の研究 X I—— 日本心理学会第61回大会発表論文集, 952.
- Klaus, M. H., Kennell, J. H. 1982 Mothers separated from their new born infants. *Pediatric and Clinic North America*, 17, 1015-1022.
- Knapp, M. L. 1972 *Nonverbal communication in human interaction*. Indiana: Holt, Rinehart & Winston. 牧野成一・牧野泰子 (訳) 1979 人間関係における非言語情報伝達 東海大学出版会.
- McNeeley, D. A. 1987 *Touching: Body therapy and depth psychology*. Toronto: Inner City Books.
- 水口公信・下仲順子・中里克治 1982 日本版 STAI

- 状態・特性不安検査 三京房.
- Montagu, A. 1971 *Touching: The human significance of the skin*. New York: Columbia University Press.
- Raphael-Leff, J. 1983 Facilitators and regulators: Two approaches to mothering. *British Journal of Medical Psychology*, 56, 379-390.
- Sivik, T. 1993 Alexithymia and hypersensitivity to touch and palpation. *Integrative Physiological and Behavioral Science*, 28, 130-136.
- Spielberger, C. D., Gorsuch, R. L., & Lushene, R. E. 1970 *Manual for the State-Trait Anxiety Inventory*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- Spitz, R. A. 1946 Anaclitic depression. *Psychoanalytic Study of the Child*, 2, 313-342.
- Stein, N., and Sanfilipo, M. 1985 Depression and the wish to be held. *Journal of Clinical Psychology*, 41, 3-9.
- 鈴木晶夫・春木 豊 1989 対人接触に関する試験的研究 早稲田心理学年報, 21, 93-98.
- 鈴木眞雄・松田惺・永田忠夫・植村勝彦 1985 子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家族環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成 愛知教育大学研究報告, 34, 139-152.
- Symonds, P. M. 1939 *The psychology of parent-child relationships*. Appleton Century Crofts.
- 山口 創・春木 豊 1998 身体接触が気分に及ぼす影響——身体心理学の研究 X X V—— 日本心理学会第62回大会発表論文集, 1039.
- Zung, W. W. K. 1965 A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, 12, 63-70.
- (2000.2.9 受稿, 2000.11.27 受理)